

エンカウンター（ENCOUNTER）

第 134 号

平成 25 年 6 月 20 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.gr.jp/>

小西芳之助「ローマ人への手紙 講解説教」より（13）

第 50 講 基督教道德の第 2、愛（2）

復活の望みをいだいて喜べ

望みをいだいて喜び、艱難に耐え、常に祈りなさい。

（ロマ書 12 章 12 節）

〔ロマ書第 12 章〕12 節「望みをいだいて喜び、艱難に耐え、常に祈りなさい。」私は、この 12 節は非常に大切な箇所であると思います。「望みをいだいて喜び」というのは、復活の望みをいだいて喜べという意味であります。いわゆるクリスチャン・ホープ、キリスト者の望みと言えば復活の望みでありますから、その復活の望みをいだいて喜べと言っているのであります。私は、この 12 節が本日の山であると思います。復活の望みによって、望みをいだいて喜ぶ。これはいかなる境遇でもできる。誰でも、どこでも、いつでも、可能です。

次に「患難に耐え」とありますが、望みをいただいて喜ぶから患難に耐えられる。患難というものは我々に付きものです。この世では、誰にでも、必ず艱難がやってきます。しかし、パウロは8章18節で「私は思う。今のこのときの苦しみは、やがてわたしたちに現されようとする栄光に比べるというに足りない」と言いました。そうですから「望みをいただいて喜ぶ」、この喜びを我々は味わう者とさせていただきたい。これがあれば、人生に恐るべきものはなくなります。

「常に祈りなさい」。我々の祈りの中心は、復活であります。我々の生活のすべてが我々の復活に集中してくる時、我々に力が出てきます。パウロの生涯は、復活が目当ての生涯です。パウロが、普通の人にできない人生を展開し得たのは、実に彼が復活を目当てに走っていたためであります。パウロは、「我は生命の冠を目当てに走る」と言っておりますが、また、「常に祈れ」と言っています。我々は復活させてもらうということを常に祈る。これには、「主の名を呼ぶ」という行が一番よいと思います。 (P.381)

貧しい聖徒を助け、旅人をもてなせ

貧しい聖徒を助け、努めて旅人をもてなしなさい。

(ロマ書 12 章 13 節)

13 節「貧しい聖徒を助け、努めて旅人をもてなしなさい」。この「助ける」という原語の意味は、「同情または援助をもって自己を他人に結びつける」という意味です。ですから、貧しい生徒、すなわち、福音の指導者や信者達に対して、物資をもって助けるという意味であります。前にもお話ししましたが、我々の尊敬する藤井武先輩は、貧しさの故に毎朝お粥^{かゆ}をすすっておられた。我々の先輩は、皆そうして福音を述べ伝えてきました。福音の指導者というものは、大体は貧乏であると相場が決まっています。パウロ先生も貧乏でした。ローマの獄につながれていた時、ピリピ教会から或る人が贈り物を持ってきました。パウロは、ピリピ教会の兄弟姉妹達の行為を非常に喜び、やがてあのピリピ書が出来上がりました。そうですから、人類の宝と言われるあのピリピ書は、ピリピの兄弟姉妹のパウロに対する贈り物、同情から生まれたと言っても過言ではありません。我々は、貧しい生徒に対して、物資を持って助けるということを努めたいものであります。 (P.382)

喜ぶ者と共に喜び、泣くものと泣きなさい

15 節「喜ぶ者と共に喜び、泣く者と共に泣きなさい」。喜ぶ者と共に喜ぶことは難しい。この難しいことが先に出てきています。悲しむ者と共に悲しむということは比較的やさしいが、共に喜ぶことは我々にとってほとんど不可能に思えます。しかし、我々に聖霊が徐々に降るとき、我々は信仰相應に、他人の幸福を喜ぶことが出来るようになります。...

どの節をとっても、非常に難しいことばかりであります。しかし、内村先生は、主の霊を受けて分相應にこれをなそうと努力することによって、信仰生活に力が生ずると言われました。我々は、神の霊を頂いて、...自分の信仰相應にこれを励んで見る必要があります。

人類の、我々人間の幸か不幸かは、このパウロが教えている愛の教えをどの程度行い得るかということにかかっています。ですから、この 12 章に説かれているこの愛の行ないは、ロマ書の付録の部分ではなく、中心問題であると言っても宜しい。愛の行ないは木の実であり、救いに入る条件、すなわち、贖いの信仰ではありませんけれども、これらの行ないというものが、個人あるいは、人類の幸福を決定すると私は思う。 (P.384)

我がくびきはやすく、我が荷は軽い

イエスは「我が^{くびき}軛はやすく、我が荷は軽い」と仰せになりました。我々は、主の名を呼んで、自分の目の前に置かれた義務を尽くせば宜しい。やっているうちに、これに近づいてきます。無理に、一度に高い山を望む必要はありません。幸い、主の名を呼ぶことも、目の前に置かれた務めを果たすことも、不可能ではありません。ある意味においては易い。我々に三の力があれば、三をやったら宜しい。五をやろうとするから難しい。諸君、目の前におかれた分相應の務めを、誠心誠意やろうではありませんか。 (P.384)

私の伝道生活への転向

本日の説教に入ります前に、私事で恐縮でございますが、この9月が私の伝道生活25周年に当たりますので、そのことについて少し申し上げたいと思います。

顧みますと、25年の昔、21年間勤めておりました安田信託から、関係会社である第一木材という会社に異動を命ぜられました。昭和22年8月から9月初めまでの40日間、東京でその会社の仕事をしておりました。適当な宿がありませんでしたので、大学時代におりました同志会にお世話になることになりました。丁度夏休みでしたが、何人かの学生がその寮に残っておりました。当教会会員の山口良二君も、その時寮にいたことを覚えています。この40日の間に、私の人生に大きな転換が起こりました。私がどうして会社員から伝道者になったのか、自分でも不思議であります。一昨日、同志会の金曜会があり、私は当時の日誌を持って行きました。この日誌を読みますと、どうも私は自分で決心したというよりも、むしろ何か自然にそのように導かれたように思います。詳しくはお話しできませんが、全く不思議です。キリスト教の言葉で言えば、真理の御霊、

聖霊が降って、同志会に厄介になっていた8月4日から、9月13日までの丁度40日間に、私の心に不思議な転向が起きた。「どうも自然に決心を与えられたごとき感がする」と、私の日誌に書いてあります。...

私の日誌によりますと、25年前の9月7日(日)決心が与えられ、10日の水曜日に石館兄に報告したところ「石館は非常に喜んでくれた」と書いてあります。その同じ日に安田信託の社長に会い、今まで厄介になりましたけれども、自分はこれからキリスト教の伝道者になりたい旨を伝え、お許し願いたいと申し上げた。君がそう言うなら仕方がないと、社長から第一木材の社長に言ってくれまして、その日に会社を辞めることになりました。...その週の金曜日には、同志会に残っていた連中が送別会をしてくれた。石館兄弟も、夏休みにかかわらず、来て下さった。私の日誌には、告別式と書いてあります。その時、確か山口良二君が最後の祈りをしてくれました。

(P.388)

信仰は、聖霊の働き

信仰というものは、自分が欲するものではなく、神様から頂くものである、というのが私の結論であります。自分にとって信仰というものは欲しくない、厭なものです。しかし、神様が下さるものである、というふうに理解しています。ですから、私は未信者の方にあっても、君が信仰がないではないかという気が少しも致しません。それは、自分の信仰自体が自分から求めたものではなく、自然に与えられたという感じを持っているからであります。信仰がないのが当たり前、分からないのが当たり前であります。それなのに、自然に信仰を分からせてもらったというのは、まったくの恵み、聖霊の働きです。...聖霊の働きによって、その証しとして我らに信仰を起こさせる。説明はできないが、これは事実が証明しています。

(P.387)

神が、諸君を引き給うて、来ている

内村先生は、「自分の信仰はひとえに与えられたものであって、私がこうしたということは、何一つ言うことはできない」と言われました。「ひとえに神の恵みである」と。諸君、自分の信仰について胸に手を当てて考えてみて下さい。私が自然にこのような伝道師になったように、諸君の信仰も自然に与えられてきたのであります。自分は信仰があるなどと自慢したら間違いです。それは信仰ではない。信仰に似たものでありますが、そんなものは信仰とは呼びません。

神の賜物である「限りなき生命」、これが信仰の中心です。しかし、その信仰の中心である永遠の生命というものを、我々は欲しくない。我々はこの世のものが欲しい。健康が欲しい、名誉が欲しい、業績が欲しい、地位が欲しい。人間とはそういうものです。しかし、聖書には「神はそのひとり子を賜ったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者が、ひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである」(ヨハネ伝 3 章 16 節)と書いてあります。すなわち、聖書と言うものは、永遠の生命を神様が我々に賜ったということが書いてある書であります。

これを「福音」という。宜しいですか、はっきりと覚えておいて下さい。私もいつまで説教できるか分かりません。この高円寺東教会では、この福音を説く。それ以外のことを説きません。永遠の命なんか欲しくない我々に向かってそれをやろうと神様が言っておられる。欲しくないにもかかわらず、諸君はここへ話を聴きに來ている。不思議なことです。諸君は自分の意見で、ここに來ているのではない。神が諸君を引き給うて、來ている。言うなれば、嫌いなものを無理に食べさせられているようなものです。これを、小西芳之助の説教と言う。諸君は小西の説教は嫌いです。聞いても何を言っているのか分からない。しかし、諸君は不思議に、ここにきています。これを神の恵みと言う。諸君、聖書は諸君に永遠の生命を与えらるということを書いてある書物であることを、しっかりと知っておいて頂きたい。

(P.387)

キリスト教は、謙遜を知る宗教である

「互いに思うことを一つにし、高ぶった思いをいだかず、かえって低い者たちと交わるがよい。自分が智者だと思いがあってはならない。」(ロマ書 12 章 16 節)

〔16 節は、〕三つの部分からなっています。第 1 は「互いに思うことを一つにすること」、第 2 は「高ぶった思いをいだかず、かえって低い者たちと交わること」、第 3 は「自分が智者だと思いがあってはならないこと」であります。信者間の道德の最後にまた、謙遜が出てきています。キリスト教道德の第 1 は、「謙遜」であり、第 2 は「愛」でしたが、愛の表現、信者間の教えの最後に、再び謙遜が出てきました。この 16 節の「謙遜」が、キリスト教道德の中心をなしています。...

人間は高い地位につきたい。しかし、聖書には「低い地位につけ」と書いてある。この低い地位につくこと、これは復活が分からなければ、実行できません。復活の望みが分からない間は無理、「it's impossible!」(不可能)であります。

どうもこの辺が、キリスト教の山であると私は思います。カーライルは、「キリスト教は謙遜を知る宗教である」と言いました。

(P.389)